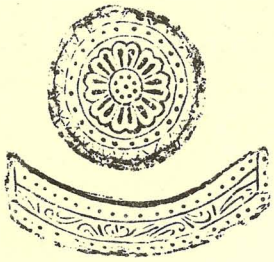
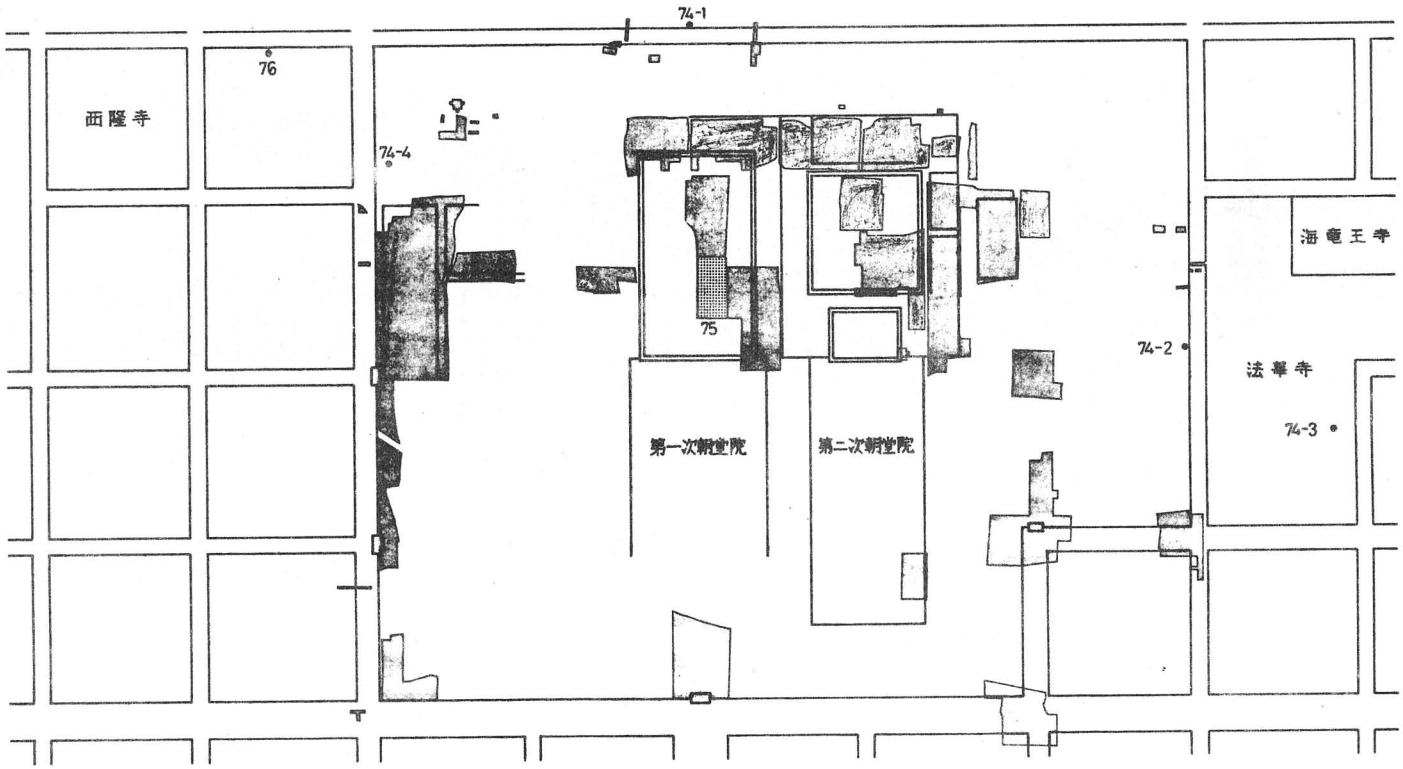
平城京羅城門・薬師寺金堂発掘調査概報



昭和47年5月

奈良国立文化財研究所



既発掘地区
発掘中 47.5.現在
● 46年度後半期発掘地点

0 300m

平城宮周辺略図

表紙カット
羅城門出土瓦

平城京羅城門発掘調査概要

今回の調査は、大和郡山市教育委員会と当研究所が協同し、昭和47年２月から３月にかけて、平城京羅城門の本体とそれにとりつくと予想される羅城の遺構を明らかにするため実施した。発掘区は佐保川にかかる来生橋西側土手下の金魚池南半部372㎡で、地番は大和郡山市観音寺町114−1　114−3である。

今回の調査は羅城門の調査としては第３次にあたる。第１次調査は奈良市教育委員会により、昭和44年７月～８月にかけて、平城京羅城門東側の遺構をあきらかにするため佐保川左岸堤防下で実施した。多くのトレンチを入れたにもかかわらず、多年にわたる洪水のためか、大部分の遺構は流出していて、ほとんどその跡をとどめていなかった。出土遺物は、奈良時代の瓦破片数点と近世の漆器の椀２点である。第２次調査は大和郡山市教育委員会により、昭和45年３月～４月にかけて、平城京羅城門西側の遺構を明らかにするため佐保川右岸の堤防付近で実施した。検出した遺構は、朱雀大路西側溝と築地・九条大路北側溝と築地・羅城外の濠等である。出土遺物としては、朱雀大路西側溝より多数の、瓦・須恵器、和同開珎２枚・木簡１点（判読不明）等があり、朱雀大路西築地の西側より多数の軒丸・軒平瓦・垂木１本、さらに九条大路北側溝より和同開珎１枚・木片、九条大路北犬走りより多くの瓦等が出土した。

今回第３次の調査で検出した遺構は、羅城門の基壇・築地寄柱穴・側溝・暗渠等である。

羅城門基壇　　基壇は大部分が、佐保川河道付替工事により破壊されている。今次検出したのは、基壇の西北辺にあたる。基壇の上面及び周囲は平安時代に削平されており、基壇化粧や雨落溝は検出できなかった。基壇そのものも掘り込み地業を調査した結果、西辺で1.32ｍ　北辺で１.０ｍ削り取られていることが判明した。現状で基壇の高さは0.６ｍ、掘り込みは0.22ｍある。基壇の掘り込み地業は最下層に粘土を置き、その上に粘土や礫・砂等を互層に積み、縞状につきかためたものである。

門の礎石や根石の推定位置は今回の発掘区には含まれていない。昭和10年の

来生橋改修の際、佐保川右岸より花崗岩質の礎石が4個（うち1個は唐居敷）出土している。

平城京朱雀大路の幅を築地心々で28丈（約84m）と仮定し、その中軸仮定線と第2・3次の発掘結果により、羅城門の基壇の規模は東西34m、南北20.4m（または22.4m）となる。したがって桁行5間、梁行2間または3間の重層門であると推定される。

築地寄柱穴　築地の基底部は削平されており、明確には検出できなかったが、基壇西面の中央部にとりつく築地の寄柱と推定される穴を検出した。その寄柱穴は2対あり、一方は柱間2.7m、他方は柱間4.2mである。両者の前後関係はわからない。

側溝　側溝は、昭和45年度の調査のとき検出した朱雀大路西側溝の南延長部分にあたり、羅城の下を通って京の外濠に注ぐものと考えられる。調査区の南端では幅4m（復原値、現状は5m）深さ0.8mあるが、北端ではあふれた流水によって扇形に拡がっている。側溝の底部東寄りに護岸に使用されたと思われる石（約0.3×0.4m）が多数ある。これらの石の下やあいたから、和同開珎が10枚発見された他、奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦・土馬・帯金具・釘等が出土している。遺物の出土状態から考えて、この溝は平安時代まで存続していたものと考えられる。

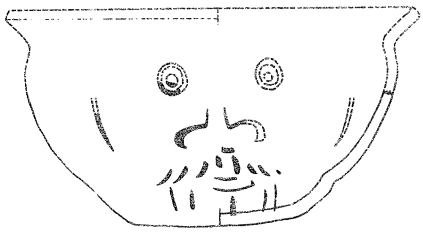
暗渠　側溝に添って南北に走る幅0.9m、深さ0.4mの溝状遺構がある。羅城造営当初からの暗渠と考えられるが、側溝底より0.3m高く、北から南に向って低くなっている。この溝は木樋の暗渠の掘り方であろう。

以上3回にわたる羅城門とその付近の発掘調査の結果、羅城門基壇・羅城門西にとりつく築地・朱雀大路の西側溝とその西側築地・九条大路の北側溝とその北側築地・羅城の外濠が明らかとなり、平城京の朱雀大路・九条大路・羅城門・築地（羅城）の配置を統一的にとらえることができるようになった。

遺物は、主として朱雀大路西側溝の南延長部分から出土した。主なものは、瓦・土器・土馬・金属製品・和同開珎などである。

瓦　　軒丸瓦は、6133・6284・6285・6304－Lの4種、軒平瓦は6694・6721の2種ある。この他に面戸瓦1点、丹のついている瓦1点がある。

須恵器　　坏（高台がつく）・蓋・高坏・壺・鉄鉢等で奈良時代中頃のものである。



土師器　　坏・甕・広口壺等で奈良時代後半のものである。広口壺は、10個体分出土しており、口径16－17㎝、高さ8－10㎝の小形の壺である。作りは粗雑で、胴部に粘土紐の痕を残し、底は凹凸がいちじるしい。胴部に人面を墨書している例がある（上図）。奈良時代後半のものである。

黒色土器椀　　厚手軟質で内外面黒色をしており、内底面に波状の暗文がある。断面三角形の低い高台がつく。平安時代前半のものである。

瓦器椀　　比較的薄手硬質で黒銀色をしており、内外面を粗く篦磨きし、外面胴下半に斜行する暗文、内底面に平行する暗文がある。丸い底には低い高台がついている。平安時代中頃のものである。

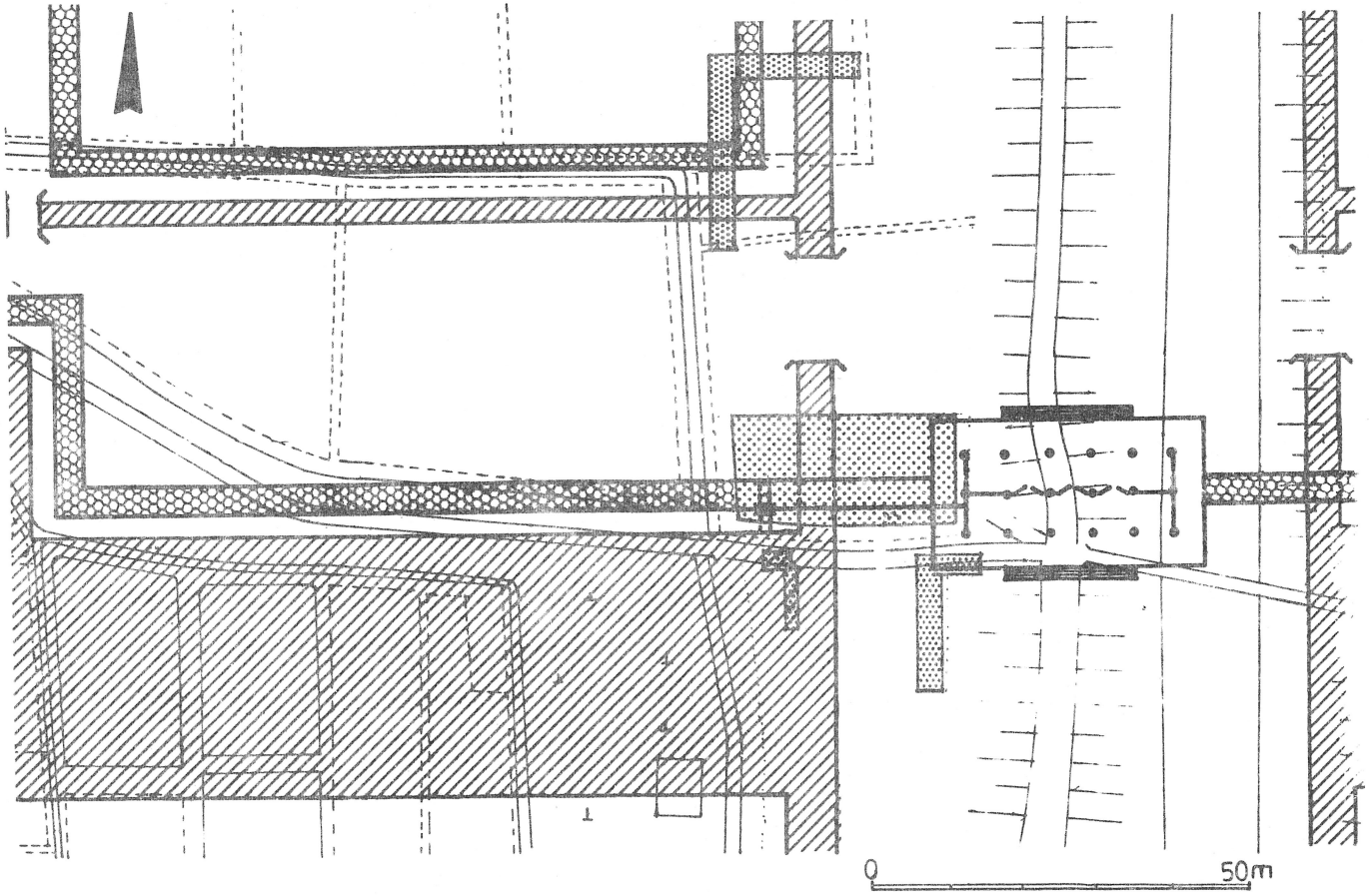
土馬　　胴部の残欠で、奈良時代後半のものである。

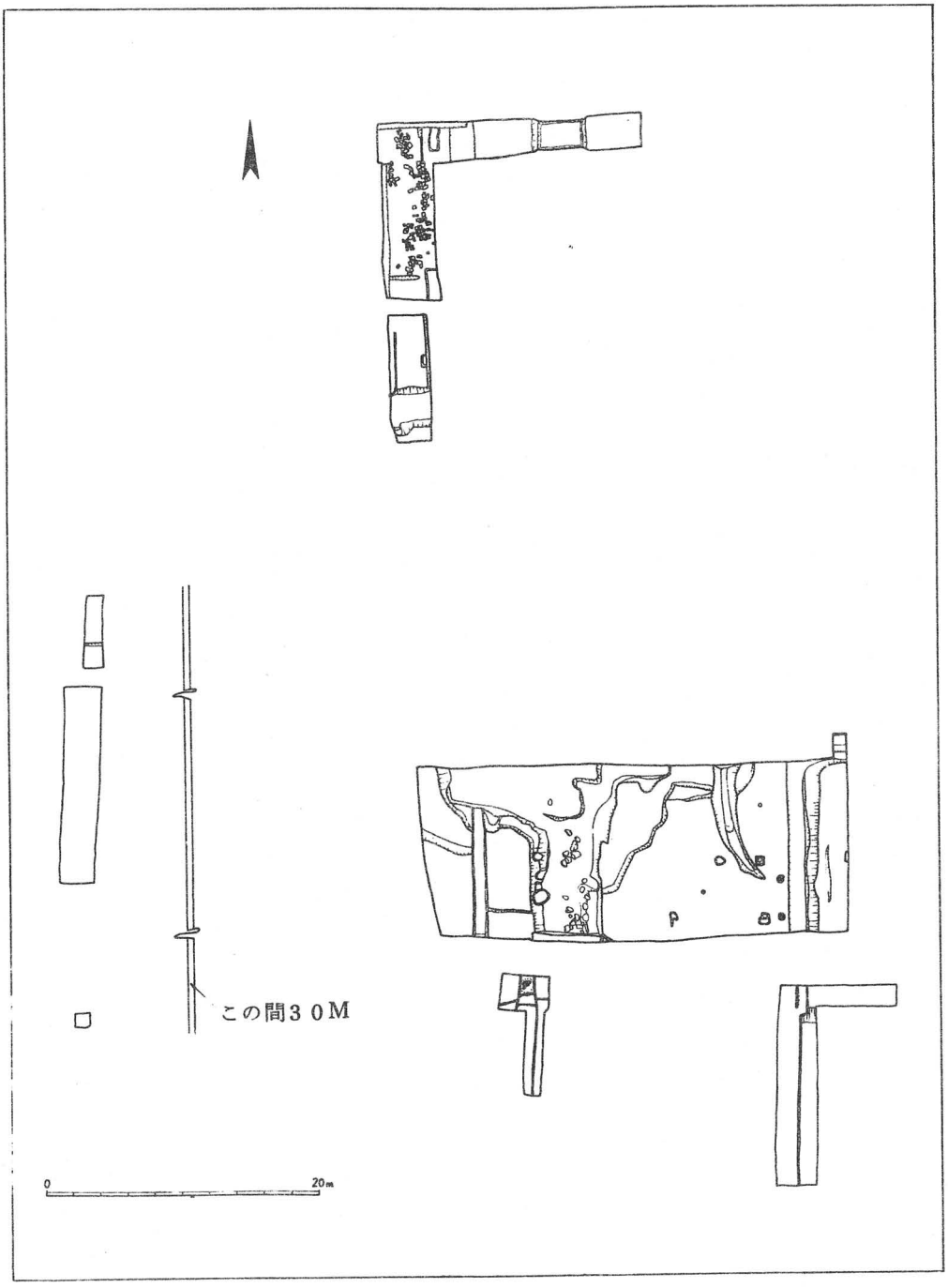
金属製品　　帯金具は、帯先につける鉄製の鉈尾で、裏に釘3本を鋳出している。青銅製釘は、長さ7㎝、断面四角形をしており頭部は扁平になっている。

羅城門関係史料

和銅7（715）・12・26	新羅使入京　三椅に迎う	続紀
天平19（747）・6・15	羅城門に雨乞いす	続紀
天平勝宝6（754）・4	鑑真入京　安宿王に勅して羅城門に迎えしむ	元享釈書
宝亀8（777）・4・17	遣唐大使佐伯今毛人羅城門に到り病と称して留まる	続紀
宝亀10（779）・4・30	唐使入京　京城門外三橋に迎接す	続紀

平城京羅城門付近復原図





平城京羅城門第２次・第３次発掘調査遺構

薬師寺金堂発掘調査概要

1. 遺　　構

今回の調査は金堂復興工事に伴い、創建当初の遺構をあきらかにするために実施された。発掘に先だち、現基壇の写真測量をおこない、ついで江戸時代に拡大修造された壇正積基壇の花崗岩化粧石・敷瓦・旧裳階柱筋の置き重ね礎石及び地覆石などを取り外し、さらに向拝部の礎石・積土を排除した。以下検出した創建時の遺構について述べる。

基壇は東西２９.１９ｍ、南北１８.０１ｍ、復原高1.４９ｍ（５尺）である。基壇の掘込地業はみられず、積土は砂土と粘土の互層によって積み固められている。地覆石は地山上の整地土に据えられており、延石はみられない。周囲の基壇石積は束石を用いず厚い羽目石を立てただけの古い形式で、隅の羽目石はＬ字型のものを使用している。

建物は７間×４間、裳階つきで、桁行柱間総長２６.７３ｍ（９０尺）、梁行柱間総長１５.６０ｍ（５２.５尺）、軒の出4.１６ｍ（１４尺）である。（各柱間寸法は図面参照）礎石は基壇土を途中まで積上げた段階で掘り込み据えられている。根固石はみられない。裳階礎石は現側柱礎石の直下にそれぞれ認められ、据えつけ掘方は基壇上面から切込まれていた。本柱と裳階柱の礎石の据えつけ方がこのように何故異るかは明らかでない。なお、裳階礎石は特に不同沈下が著るしい。

礎石地覆座の有無及び形状から、身舎の５間×２間は前面中央３間と背面中央１間が扉で、その他は壁で囲われていたと推定できる。その外の側柱筋は開放であったらしい。裳階では背面中央５間の礎石にのみ地覆座がある。その形態からみて中央の１間は扉口、両脇各２間は壁と考えられるが、背面以外の扉や窓の配置については不明である。

階段は正面では中央及び２間おいて東と西に計３個所、東西両側面と背面ではそれぞれ中央に１個所すつ幅１間分の規模のものが設けられている。

基壇まわりには玉石敷の犬走りがあり、さらに幅0.４５ｍの雨落溝がめぐら

されている　玉石敷や溝には補修されている部分がある。

なお、創建後の遺構の変遷について述べると、享祿の火災によると思われる羽目石の焼損痕跡や焼土面により、火災以前に、正面の東と西の階段が取除かれていたことがわかる。また現向拝礎石の真下から中世に据えた礎石が検出され、その上面に前記の焼土層が密接するので、中央5間分には中世から現状と同規模の向拝のあったことが判明した。正面両脇階段の取除きはこの向拝の設置に関連するのであろう。なおこの向拝には板張りの床が設けられた時期のあったことが、羽目石上端になされた根太仕口により推察される。唐招提寺の例などからみると、向拝部が舞台のように使用されたものと思われる。

2. 出土遺物

- 青銅製品　葡萄唐草文飾金具、垂木先飾金具（方形・円形）、鈴、その他
- 鉄製品　釘類
- 古銭　大観通宝、寛永通宝、その他
- ガラス製品　玉類
- 乾漆　仏像破片
- 瓦　蓮華文・巴文軒丸瓦、唐草文・剣頭文軒平瓦、道具瓦、その他
- 土器　土師質灯明皿、その他

3. 薬師寺路年表

天武9年（680）	天皇、中宮（後の持統天皇）のために薬師寺の建立を発願す（本薬師寺）
養老2年（718）	平城京内右京六条二坊（現在地）に移建す
天平2年（730）	東塔建つ
天祿4年（973）	火災により講堂、食堂、三面僧坊以下の諸堂焼失。金堂・東西両塔は無事
永祚元年（989）	大風により金堂上層の閣、吹落される。
康安元年（1361）	地震により金堂上層傾き、両塔破損す。

文安２年（１４４５）　大風により金堂・南大門倒壊す

文安５年（１４４８）　仮金堂成る

大永４年（１５２４）　金堂再興

享祿元年（１５２８）　兵火により金堂・講堂・西塔など焼失す。

天文８年（１５３９）　大風により諸堂破損

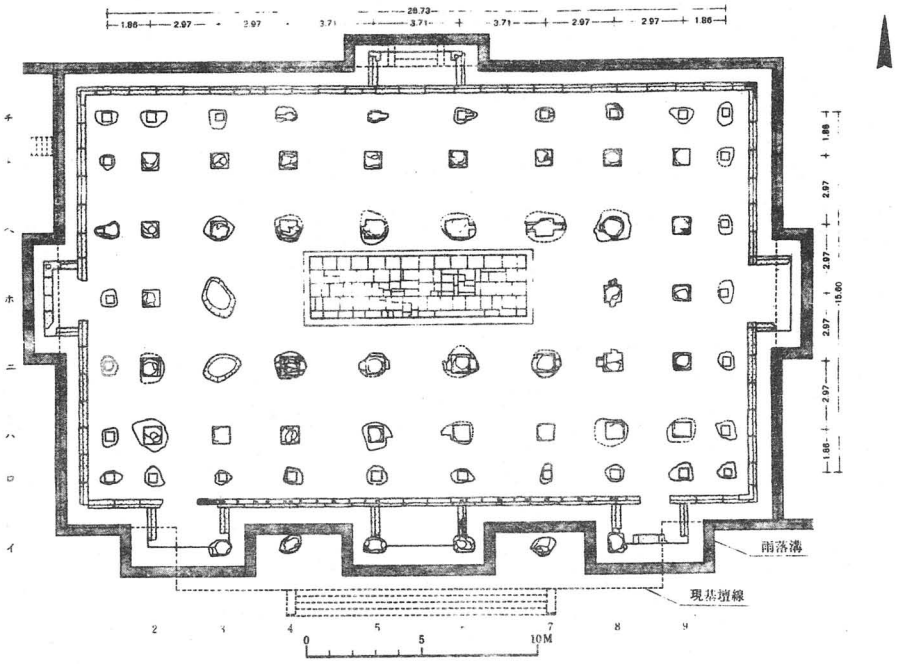
天文14年（１５４５）　仮金堂再興（現金堂束墨書）

慶長５年（１６００）　増田長盛　仮金堂を修造す。

寛永12年（１６３５）　仮金堂を瓦葺とす。

延宝４年（１６７６）　金堂修理再建

宝暦・明和・安永　　金堂修理



金堂基壇平面図